

〔書評〕

とことん調べつづけるのが 〈科学〉

田中玄伯「超能力」授業入門

村田 憲治

◆ルービックキューブをあっという間に完成させる男

著者である田中氏の〈超能力マジック〉を初めて目にしたのは、日本テレビ系列で放映していた「投稿！特ホウ王国2」という番組の中で、「パズルをあっという間に完成させる男」として彼が紹介されたときだった。(1997年3月)彼は、20年近く前に大流行したルービックキューブを手にして現れた。もちろん、各面の色はバラバラだ。TVレポーターがそれを受け取り、色を揃えようとカチャカチャ動かしながら、「30秒くらいで完成させるんですか?」と尋ねると、童顔の彼は真面目な顔で「1秒もかかりません」と答え、静かに微笑した。「そんなことでできませんよ!」とあきれれるレポーターの前で、彼は「まあ見ててください」とつぶやき、ルービックキューブを両手で包むように軽く持った。真剣な面持ちで数回ゆっくりとキューブをまわした後、彼の手が止まった。彼の両手がアップになる。まだキューブの色はバラバラのまま。そして次の瞬間、ルービックキューブの色は完全に揃ってしまった!レポーターは悲鳴に近い驚きの声を上げ、スタジオは騒然となった。すぐに今の映像がスロー再生されたが、スローで見てもバラバラのルービックキューブが、まさに〈一瞬で完成〉する。いったい何が起きているのだ。頭の整理がつかないうちに、TVの中の田中氏は「今度は、バラバラの状態のキューブを投げ上げて空中で揃えます」と言い放った。そして彼がキューブを軽く投げ上げ、両手で受け取ったとき、すでにそれは完成していた。

衝撃的な映像だった。その夜、床に就いてからもいろいろな可能性を検討してみたが、確信の持てる解答は得られなかった。このときほど寝つけない夜は近年になかった。

◆何が彼をこうまで駆り立てるのか

その1か月後、京都で行われたJAPAN SKEPTICSの総会で、見覚えのある青年が「岐阜の村田先生ですね」と声をかけてくれた。なんと田中氏ではないか。どうして私を知ってるのかと思って尋ねると「科学教育研究協議会の全国大会のとき、村田先生から『素手で蛍光灯を点灯させる装置』を買ったことがあるんです」と彼はニコリ笑った。

「科学教育研究協議会」とは、「自然科学をすべての国民のために」というスローガンのもとに全国の小中高校理科教師が集い、組織している民間の科学教育研究団体なのだが、毎年夏に行われるその全国大会で、私は彼の言う〈超能力マジックネタ〉である装置を販売していたことがあったのだ。「これはチャンス」とばかりに、彼の顔色をうかがいながらあのルービックキューブの秘密を聞き出そうとしたのだが、「あれは何年もかかって開発したオリジナルネタですからね。そんな簡単には教えられませんよ」とつれない返事。「そのころ僕はルービックキューブを1日中持ち歩いてましてね。それこそ通勤のクルマの中にもね。信号で止まるたびに練習しましたよ。信号が青になっても気がつかないで、後ろのクルマにクラクションを鳴らされたりしてね、ははは」話し振りはめっぽう明るいのだが、彼の〈超能力マジック〉開発への並々ならぬ執念が強く感じられた。彼は、「昔、ユリ・ゲラーが時計の針を〈念力〉でグルグル回す、なんてことをやってたでしょう。あれと同じことができるんですよ」と、袖をまくって安物(失礼!)のスウォッチを出した。そして「よく見ててくださいよ」と言いながらその腕時計に右手の人差し指を近づけた。驚いたことに時計の針が、彼が指差す方向に「ジッ、ジッ」と動くのだ。あっけにとられる私をちらりと見た彼は悪戯っぽく笑い、「最後に大ワザ、『大車輪』です」

むらた・けんじ 岐阜県立山県高等学校教諭, JAPAN SKEPTICS 第4期運営委員。共著書に『のらねこの挑戦』(新生出版)。

などと言いながら人差し指を腕時計の上でぐるぐる回した。何と時計の針は、文字盤の上をすごい勢いで回転しはじめた。そのときに私が受けた衝撃をご理解いただけるだろうか。〈背筋がゾットする〉というのは、おそらくあの時のようなことをいうのに違いない。

私はその仕掛けをしつこく尋ね、その秘密を聞き出した。知ってしまえばどうということもないのだが、そういう時計を探し出してきて、彼独特のスマートな語りも含めてひとつの〈芸〉にまで仕上げられているのには舌を巻いた。田中氏は、大きなカバンから次々と怪しげなものを取り出して見せてくれた。どれもが驚くべき〈超能力マジック〉だった。さらに彼は、現在温めているアイデアを熱っぽく語り、そのために探しまくっていたものを今日やっと東急ハンズで見つけて買って来たところだ、と笑った。いったい何が彼をここまで駆り立てるのだろうか。単なる〈手品好き〉では片づけられない何か彼の笑顔の裏に隠されているような気がしてならなかった。

◆とことん調べつづける科学の眼

この疑問が彼の著書「『超能力』授業入門」を読んで水解決した。彼が担当する理科の授業開きは、「スプーン曲げ」から始まるのだそうだ。一般的な意味で、彼は相当に〈異端〉であることは間違いない。あつけに取られる生徒たちの前で次々に〈超能力マジック〉や〈科学マジック〉を演じつづけて、ついにはガラスのコップを手も触れずに割ってしまう。そこで彼はこう言う。

「この超能力マジックのタネは熱でしょうか？ 電気でしょうか？ 音でしょうか？ それとも…？ それを考えることから科学は始まります」

そして次の台詞で最初の授業を締めくくるとのさだ。 「手のひらを開いてください。みなさんの手のひらには芽が生えてきています。何という芽だと思えますか？ …科学の芽（眼）が生えてきたようですね。身の回りにある不思議でわからないことに出会ったら、とことん調べつづける科学の眼を育てましょう」

アブリ・シャッツマンの著書「科学と社会」（1971）の中の「考えることを教えない科学教育は、科学を教育しているのではなく、単に従順さの教育をしているに過ぎない」という一節を思い出した。田中氏の〈超能力授業〉は、実は異端でも何でもないのである。それは〈単に従順さの教育〉

にすぎなかったこれまでの科学教育に対する痛烈な異議申立てなのだ。そして、生徒に見せる数々のマジックの半分は種明かしをして、もう半分は謎のままにしておくという手法は「考えなさい。それが科学なのだ」というメッセージに他ならない。その点は、この本も例外ではない。明日の授業ですぐにも使える〈超能力マジック〉、〈科学マジック〉が満載ではあるのだが、種明かしのないネタもかなりある。安直にノウハウを手に入れようとしている御仁には不満の残るところもあるかもしれない。しかし、（自戒を込めて言うのだが）そうやって安直に正解を知りたがる耐性の無さが科学教育をつまらないものにしてきたのではないだろうか。私たちは、〈謎に対する耐性〉を鍛える必要がある。そして粘り強く考え続けなくてはならない。そしてそれは、〈苦しみ〉ではなく〈喜び〉であるはずなのだ。科学とはそういうものだ。田中氏はこの本の中でそれを教えてくれている。

◆存在そのものがメッセージ

超能力ネタを紹介した頁もさることながら、終章となる「超能力開発日記」も出色の出来だ。「スプーン曲げ」用のスプーンを探すため、磁石を持って（曲げやすい安物のスプーンは磁石にくっつくのだそうだ）百円ショップを渡り歩く。いんちき超能力番組のタネを見破るために、ビデオでスロー再生・コマ送りを繰り返し、ビデオデッキを何台も壊してしまう。カップ麺の容器をヘアドライヤーの風で（空中浮遊）させるために20種類のカップ麺を（容器欲しさに！）買ってきて食べる。ヘアドライヤーの音を消すために防音材を探し求めてホームセンター・電気屋巡りをし、2か月もの間試行錯誤を繰り返す。ニセ超能力ショーを見るために長崎まで出かける。新婚旅行先は、マジックショー見たさにラスベガス。等々、田中氏の好奇心と行動力と粘り強さにはまったく感心させられる。観客の前でスマートに演じる彼の、舞台裏での地道な努力（彼はそれさえ楽しんでるようであるが）がしのばれ、たいへん興味深い。「とことん調べつづけるのが〈科学〉だ」というメッセージを、彼の存在そのものが体現していると言えるのかもしれない。一読をお勧めする。

「超常現象を科学する7 『超能力』授業入門」田中玄伯著 かもがわ出版刊 定価1500円（税別） ISBN4-87699-368-8 C0336